

アジアおよび静岡の茶と茶文化をめぐる学際的研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 戸部, 健, 今村, 直樹, 長沼, さやか メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008856

アジアおよび静岡の茶と茶文化をめぐる学際的研究

戸部 健、今村直樹、長沼さやか

はじめに

アジア各国の茶生産や茶文化のありようについては、すでに相当量の研究蓄積がある。また、分野によっては、ディシプリンを横断した共同研究も増えており、新しい成果が次々と生まれている。その一方で、アジアの各国・各地域での茶生産・茶文化の動向を相互に比較・検討した研究は、茶研究全体から見れば依然として多いとは言えない。また、研究手法についてもまだ開拓の余地があると考えられる。

2014年、以上のような認識を共有する三人（戸部健・今村直樹・長沼さやか）によって研究グループが発足した。三人の研究手法やフィールドは大きく異なるが（戸部は中国近現代史専攻、今村は日本近世近代史専攻、長沼は中国地域研究専攻）、それぞれの成果を総合することで、アジアという広い視野から日本および静岡の茶・茶文化を多面的に捉えていきたいと考えている。以下、今年度における各人の活動状況について簡単に報告する。

1. 茶業を中心とした近現代東アジア関係史への展望（戸部）

本プロジェクトにおける戸部の研究課題は、茶業の交流をいう視点から近現代東アジア史を再構築するというものである。具体的には、近現代におけるお茶の生産およびその国外への輸出の増加が、東アジアの各国相互の関係やそれぞれの国の地域社会のありようによつてどのような影響を与えたのか、ということを中心に文献史料を駆使して解明することを目指している。同様の観点からなされた研究は、例えば19世紀後半の中国における茶貿易の動向を国際市場との関係から検討した陳慈玉の研究（『近代中国茶業的發展與世界市場』中央研究院經濟研究所、1982年）や、20世紀前半の台湾茶の国際的な展開について論じた河原林直人による研究（『近代アジアと台湾—台湾茶業の歴史的展開—』世界思想社、2003年）、そして明・清・中華民国期の浙江省における茶業の展開と地域社会との関係について考察した雛怡の研究（『明清以来の徽州茶業與地域社会—1368～1949—』復旦大学出版社、2012年）など、すでにいくつか存在する。

ただ、検討の余地は依然として多く残っている。注目すべきは、当時の東アジア全体における日本茶業の位置である。近代において日本は、周知のようにインドや東南アジア、中国などと同様、世界における主要な茶生産地であった。特に静岡県の茶は横浜港や清水港などから主に北米に向けて輸出され、その日本の輸出量全体に占める割合は、特に明治期において非常に大きかった。それゆえ、近代日本の茶貿易に関する従来の研究は、対米輸出に関するものが圧倒的に多かったと言える。しかし、日本茶の輸出先は時代によって大

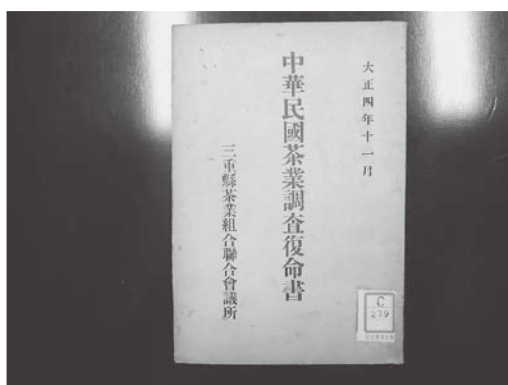


東京茶業会館の外観

大きく変わっていった。20世紀に入ると中華民国や「満洲国」、モンゴル、ソ連への輸出が模索され、第二次大戦後は北アフリカへの輸出も増えている。また、日本茶のライバルとなりうる他の茶生産地についての調査もたびたび行なわれていた。そうした動きは日本の占領地域が拡大する日中戦争期以降さらに活発になる。このような日本茶業の動きは、当時やその後の東アジアの各国、各地域にどのような影響を与えたのであろうか。戦後における中国大陸や台湾での茶業の展開も念頭に入れながら検討していく必要があると考える。

以上のような問題関心から戸部は、20世紀前半、特に1930、40年代の茶業をめぐる日中交流史について研究を始めている。その手始めとして、日本国内の図書館などに所蔵されている関係史料の収集に目下着手している。ただ、始めてみて分かったことだが、当該問題に関する史料は日本国内に散在している。そのうち比較的多くの関係史料を所蔵しているのが後述する日本茶業中央会茶業文庫、および国立国会図書館、東京大学附属図書館（経済図書館、農学生命科学図書館、東洋文化研究所）や京都大学経済学部図書館などであるが、それらだけですべての史料が揃うわけではない。旧高商系の大学図書館にも、そこにしかない珍しい史料が保存されている場合がある（例えば、満鉄地方部商工課『支那茶の大要』同所、1933年、のように、国内で唯一滋賀大学経済経営研究所だけが所蔵している史料もある）。それゆえ、効率的に調査をしていくために、事前に各館の所蔵状況を整理する必要があった。

その結果、関連史料を最も纏まって所蔵しているのは、先述した日本茶業中央会茶業文庫であることが分かったので、2014年9月に調査に赴いた。茶業文庫は、東京都港区東新



『中華民國茶業調査復命書』

橋にある東京茶業会館の5階、公益社団法人日本茶業中央会の事務所内にある。いわゆる図書館ではなく、事務所内の倉庫の一角に書籍を配置しているという状況であるため、閲覧の際には事前に連絡する必要があった。書籍は移動式書架に配架されており、閲覧時は倉庫外の応接スペースを利用した。状態の悪い資料も多く、おそらくコピーは不可能だろうと思いその可否を問わなかったが、デジタルカメラでの撮影については許された。

茶業文庫の所蔵資料については日本茶業中央会の前身である茶業組合中央会議所が1942年に編集した『支那茶業文献目録』と、日本茶業中央会が1959年に編纂した『茶業文庫目録』からある程度知ることができる。ただ、戦後の混乱のなかで一部資料が散逸したため、『茶業文庫目録』の記述のほうがより実態に近い。もっとも、今回対応して下さった方のお話では、その後も資料の消失があるという。

それでも茶業文庫が所蔵する史資料の量はかなりのもので、戸部が関心を持っている20世紀前半の中国の茶業に関する史料も多く含まれていた。そのうち今回撮影できた以下の史料は、NDL-OPAC（国立国会図書館）やCiNii Books（国立情報学研究所）で調べたところ、国内では茶業文庫のみが所蔵しているようであった。

三重県茶業組合聯合會議所『中華民國茶業調査復命書』（1915年）、上海商業儲蓄銀行調

査部編『上海之茶及茶業』（上海商業儲蓄銀行信託部、1931年）、兪海清編著『江西之茶業』（国民政府実業部上海商品検査局、1932年）、安徽省立茶業改良場編『皖西各県之茶業』（1934年）、建設委員会経済調査所統計課編『浙江之平水茶』（建設委員会経済調査所、1937年）、芦屋芳雄『中支茶業調査（武漢地方）』（1939年）、田中敬三『決戦下 茶を新利用途へ』（静岡県茶業組合聯合会議所、1943年）、済南茶葉業統制組合『済南茶葉業統制組合定款及統制規程（附役員名簿及組合員名簿）』（出版年不明）、清水彦四郎『支那茶特殊事情』（出版年不明）。

このように、茶業文庫での調査において戸部は多くの関連史料を集めることができた。ただし、上述したように、史料は散在しており、ここだけで十分な量の史料を集められるわけではない。そのため、このほかにも大学図書館間での相互貸借や、中国で近代に発行された雑誌資料のデータベース（「民国時期期刊全文数拠庫」など）を利用して史料を収集しているが、依然として入手できていないものも多い。今後はまだ調査できていない国内外の図書館・文書館に赴き、関連史料を手に入れていきたいと考えている。その上で、近現代東アジアにおける日本茶業の位置づけについて考察を深めていきたい。

2. 近世後期日本の農業生産力と茶業の位置（今村）

本プロジェクトにおける今村の研究課題は、近世後期の日本における農業生産力の実態と、そこで茶業が占めた位置を、未刊行の古文書の分析から数量的に明らかにすることで、近世近代移行期における農業生産と茶業発展との関係について検討するものである。

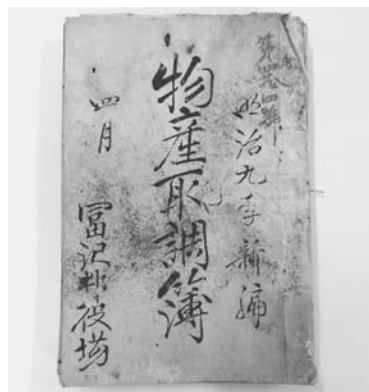
1970年代以降の日本経済史研究では、「数量経済史」を標榜する研究潮流の成果によって、近世後期における経済成長の存在が、数量データに基づくかたちで明らかにされている（速水融・宮本又郎編『経済社会の成立』〔岩波書店、1988年〕など）。そこでは、非農業部門の拡大とともに、もたらされた生産力の発展が、幕藩制の根幹であった「石高制」には反映されず、その富が幕藩領主側ではなく民間社会側に蓄積されたという指摘が行われている（谷本雅之「在来産業の展開と資本主義」〔『講座明治維新第八巻 明治維新の経済過程』有志舎、2013年〕）。日本社会における近世から近代への移行を考える上で、こうした成果には学ぶべきところが多いが、近世後期の経済成長をめぐっては、あらためて農業部門に力点を置いた議論もまた必要とされるのではなからうか。なぜならば、当該期とは前代（近世中期）に比べて諸種の農業基盤整備が進展した時期だとされており（前掲『経済社会の成立』）、実際に事例研究では農業生産力の発展が確認できること、またその富は、非農業部門と同様に民間社会側が獲得していた可能性が高いからである（蓑田勝彦「天保期熊本藩農村の経済力」〔『熊本史学』89・90・91、2008年〕）。本プロジェクトでは、とくに農業部門のなかでも茶業に光をあてるが、これは幕末の開港以降、茶が日本側の主要な輸出品の一つとなり、農村においてもその生産規模が拡大していったことを念頭においている。

一方、日本近世史研究では、当該期の茶業をめぐって、主に流通構造論・地域社会論・民衆運動論などの観点から検討が進められてきた。近世後期の静岡における茶の流通経路をめぐって、「独占」をはかろうとする都市部の茶問屋と、「自由化」を求めて広域的な訴願を行った農村部との対立像を描き出した宮本勉の成果は、それを代表的するものといえる（宮本勉「駿遠茶一件の歴史的特質」〔本多隆成編『近世静岡の研究』清文堂、1991年〕）。

しかしながら、こうした近世史研究の成果では、上述した当該期の経済成長に関する視点が希薄であり、また農業生産力全体のなかで茶業が占める位置についても、十分に明らかにされてはいなかった。今後の研究では、数量経済史研究と近世史研究とが別々に蓄積してきた成果を接合し、それを再構成・再解釈する作業が求められているのではなかろうか。

以上のような問題関心のもと、今年度の今村は、静岡と熊本という二つの地域を事例に、近世後期における農業生産力と茶生産の数量的実態を把握しうる古文書の調査をおこなった。静岡と熊本を分析対象とした理由は、全国的に有数の茶産地であること、幕末の開港以降、比較的に近接した地域に貿易港（横浜・長崎）をもち、それを受けて茶生産が発展するなど、いくつかの共通項があり、比較の対象として有効だと判断したからである。

ここでは、静岡での調査成果として、史料を一点紹介したい。それは、「明治九年新編 物産取調簿」（静岡市葵区富沢区有文書）と題された冊子である（写真参照）。これは、社会学科歴史学コース日本史学研究室が25年以上にわたって継続している「静岡市古文書調査事業」で発見されたもので、明治5～10年までの富沢村（現静岡市葵区富沢）における総生産物を示した「産物取調書上」や、「製茶取調帳」が収められている。この史料は、近世近代移行期の富沢村における農業・非農業生産物を網羅的に調査した貴重なものである。例えば、明治9年（1876）の「産物取調書上」には、穀類・醸造物類・種子果実類・禽獣類・飲料及食物類などの項目ごとに、産物名とその量、金額などの情報が詳細に書き上げられており、生産物の総額は約5,288円である。



「明治九年新編 物産取調簿」

さらに、同年の製茶代金は3,564円であり、富沢村では総生産の約67%を製茶が占めていたことがわかる。静岡地域の農村における茶生産の重要性が、あらためてうかがえよう。

以上の史料の他にも、「静岡市古文書調査事業」では近世後期の静岡地域における産物調査書も数多く見出されており、今後こうした史料群を総合的に検討することで、当該期の農村経済における茶生産の意義やその長期的な推移などが、実証的に解明できるだろう。また、今年度は熊本でも、天保13年（1842）の熊本藩領内全体の農業生産力を調査した冊子（「諸御郡惣産物調帳 上・下」、個人蔵）について調査し、全体の撮影を終えることができた。前述した静岡地域の史料とともに、本格的な検討はこれからであるが、この史料にも当時の熊本藩領内における茶生産額が記載されている。今後は、静岡・熊本における関連史料の発掘にも努めながら、冒頭で述べた研究課題の解明に取り組んでいきたい。

3. 中国広東省における喫茶文化と漢族意識（長沼）

文化人類学を専門とする長沼の課題は、中国南部の広東省において広く普及している喫茶の習慣が、漢族の伝統文化としていかなる意味を持っているのかについて、フィールドワークから明らかにすることである。

中国の茶文化に関しては、喫茶文化の歴史の変遷を文献研究から明らかにした布目（1995）や高橋（2013）、中国南部の各民族の製茶法を民族誌的に記述し、製茶の起源を考察した松下（1998）などの先行研究がある。前者は喫茶文化の起源と普及の過程を明らかにした文

化史研究であり、後者は中国南部を広く視野に入れた比較文化研究に位置づけられる。これら先行研究が歴史・空間的に広がりを持っているのに対して、長沼の研究は、現代中国の一地域において喫茶がいかなる文化的価値をもって浸透しているのかという、人々の生活に密着した微視的視点に立つ。研究の初年度である 2014 年度は、広東の人々の生活に息づく喫茶文化の諸相を明らかにするべくフィールドデータを収集した。

中国南部の亜熱帯地域に位置する広東省では、茶が人々の生活に深く浸透している。広東料理を提供する「酒楼」と呼ばれるレストランは、早朝や夜、あるいは昼下がりに、「点心」と呼ばれる軽い食事を食べながらお茶を飲む人々にぎわう。こうした習慣は「飲茶」といい、知人や家族が集まる社交場となっている。また、街では「茶庄」（または茶莊）と称するアンティーク調の店をよく見かける。茶庄では高級茶葉を販売するだけでなく、香りや味を楽しむ「功夫茶」という



飲茶で食べる点心

作法でお茶を飲むことができる。一般家庭でも、客をもてなすための茶器や茶葉を常備している。また、年中行事において神々や祖先を祭祀する際には、酒と並ぶ供物として茶が欠かせない。このように広東人の生活において、茶は重要な地位を占めている。

ところで珠江デルタでは、飲茶で同席者に茶を注いでもらった場合、人差し指と中指を折り、軽く机を 3 回叩くことで謝意をあらわすという礼儀作法がある。この作法に関する起源説が興味深い。清朝の乾隆帝が、身分を隠して江南地方（長江流域）を訪れた際、現地の茶館で従僕のみをして、主人のみをした家臣にお茶を注いだ。家臣は、恐れ多くてその場で跪こうとしたが、皇帝の身分が他人に知られてしまうと思い、机の上で人差し指と中指を折り、跪く形をまねることで礼を尽くした。それが相手に敬意を示す所作として広まり、今日の広東に伝わっているという。しかし、こうした作法は現在では、広東省周辺をのぞいてほとんど行われていない。また、江南地方と広東の間には 1500 キロメートルの距離がある。にもかかわらず、どうしてこの作法が広東のみに残されたのだろうか。

その疑問を説明する鍵が、広東人の起源にまつわる移住伝説にある。広東の人々は、自分たちの祖先がもとは漢族発祥の地である中原（黄河中下流域）に住んでいたが、戦乱などを理由に各地を移動し、広東に至ったという移住伝説を持っている。前述した飲茶の作法は、移住の途中で江南を経由した祖先が、のちに広東にもたらしたものというわけである。こうした起源説から読み取れるのは、



家庭で客と茶を飲む人々

広東人の強い漢族意識であり、先述の飲茶の作法に関する語りは、これと喫茶文化との結びつきを示唆していると考えられる。というのも、広東省は今や住民の 95%以上が漢族だ

といわれているが、唐代以前は非漢族が住む「化外の地」（文明化されていない土地）であった。それが現在のような漢族社会となったのは、宋代以降に漢族王朝の支配が確立したことで、しだいに先住の非漢族が儒教などの教養を身につけ、漢族へと転身を図っていった結果だという。そのような経緯で漢族社会が形成された広東において、喫茶文化は漢族のしかるべき教養としての価値をもち続け、現代まで人々の漢族意識の拠り所の一つとなってきたと考えられる。以上の仮説を検証するために、今後もフィールドワークと文献研究の両方から調査を進めてゆきたいと考えている。

また、上述したような喫茶文化の地域的特徴に加えて、グローバルな影響も考察してみたい。たとえば、珠江デルタはかつてイギリス領であった香港や、ポルトガル領であったマカオと地続きで近接している。珠江デルタから香港・マカオへは、19世紀頃から東南アジアやオーストラリア、アメリカなどに出稼ぎに行く際の経由地として、多くの人々が渡っていた。そのようにして故郷と海外を往復する人々がもたらした外国文化が、近現代の広東における喫茶文化にいかなる変化を及ぼしたのかについても考えてみたい。

以上の調査結果を日本や静岡の事例と比較考察し、アジアという広い視野で茶文化を捉えることが、長沼の研究の着地点である。

【本章の参考文献】

高橋忠彦

2013 「中国喫茶史」茶の湯文化学会編『(講座) 日本茶の湯全史 I 中世』思文閣出版。

布目潮風

1995 『中国喫茶文化史』岩波書店。

松下智

1998 『茶の民族誌—製茶文化の源流』雄山閣出版。

おわりに

以上、プロジェクトにおける各人の活動について報告した。まだ初年度ということで手探りの感を免れず、今後個別の研究をいっそう深めていく必要がある。また、研究成果の相互接続のあり方についても依然として確たる答えが出る状況にない。ただ、今年度の成果を通覧して分かったのは、各研究が、それぞれの地域において茶が果たした社会的・文化的意味を過去にまでさかのぼって明らかにしようとしていることである。以後、そうした点についても念頭に置きながら、研究成果の総合化の方法についてグループ内で議論していきたい。